昨年2月にパンデミックを警告

三宅善信神道国際学会理事長の著書

中国・武漢発の新型コロナウイルス感染症は2009年の新型インフルエンザ以来のパンデミックとなり、世界中を恐怖に陥れている。新型ウイルスの発生と流行は、専門家の間で以前から指摘されていたが、昨年2月に刊行された『風邪見鶏　人類はいかに伝染病と向き合ってきたか』（集広舎）で警告を発していたのは、神道国際学会理事長で金光教春日丘教会長の三宅善信師。宗教家としての視点が興味深い。

三宅師は同書の「はじめに」で次のように述べている。「たとえ未知の新型インフルエンザがパンデミックを起こしても、世界規模での被害は出ないであろうという楽観的予測もある一方で、（中略）わずか数十時間の内に高度に発達した高速交通手段によって一挙に全世界に拡散してしまうという非常に危険な世界にわれわれは暮らしているのである。（中略）このような大惨事に直面しても、人々が狼狽（うろた）えることなく対処するため、人類文明にとっての伝染病の意味を説き明かすために、私は本書を著すことにした」

同書の概要を紹介すると、

第一次世界大戦のさなか1918～19年に大流行したスペイン風邪は新型インフルエンザで、発生源の米国で50万人、「戦場」として社会インフラが徹底的に破壊された欧州では2000万人以上、戦禍の及ばない日本でも38万人の命を奪った。スペインの名が付いたのは、欧州各国が戦時体制下で報道管制を敷いた中、スペインだけが正直にその惨状を報道し、「スペインで発生した感染症」というイメージが付いたから。次の大流行は1957年のアジア風邪、68年にはA香港型のインフルエンザが大流行した。

インフルエンザウイルスは単純な分子構造なので、毎年のように劇的な突然変異を繰り返し、新型が登場してくるから、ワクチン製造が後手に回る。伝染病との戦いは、メソポタミアで人類が都市に集住した頃から本格的になり、創唱宗教もその中から生まれてきた。

「千年の都」京都・八坂神社の祇園祭の始まりは疫病封じのため。同社の祭神はインド祇園精舎の守護神である牛頭天王（ごずてんのう）で、日本で荒ぶる神スサノヲと習合した。祇園祭で山鉾からまかれる疫病除けのちまきには「蘇民将来之子孫也」と書かれている。嫁取りの旅で疲れた牛頭天王に一夜の宿を貸した蘇民将来の功績から、その子孫が玄関先に目印の茅の輪を付けると、伝染病が除けて通るようにしたのである。旧約聖書「出エジプト記」にある「過越の祭」に酷似し、宗教が伝染病の危険性の説明と回避の装置になった。

紀元前13世紀頃、エジプトで奴隷となっていたユダヤ人を、ヤハウェ神はモーセを立て「約束の地」に向かわせるが、ファラオが妨害したので、エジプトに10の災いを及ばせ、10番目で人間から家畜に至るすべての初子を奪った。ヤハウェは戸口に印のあるユダヤ人の家には災いを及ぼさず「過ぎ越された」ことに由来するのが上記の祭り。

源頼光が退治した大江山の鬼は、天然痘にかかって面相が崩れてしまった人だと推定される。「鬼退治伝説」の始まりは、中国大陸や朝鮮半島からの船が入る難波津で、今でいうグローバリゼーションの副作用である。鬼退治の桃太郎のモデルになった吉備津彦が滅ぼした「温羅（うら）」も、新羅の圧迫から逃れてきた百済の王子。大陸・半島から日本に渡って来るカモ類が新型の鳥インフルを日本にもたらす。

2002年から03年にかけて猛威をふるったSARSに関する指摘は、まさに新型コロナウイルスを予告している。

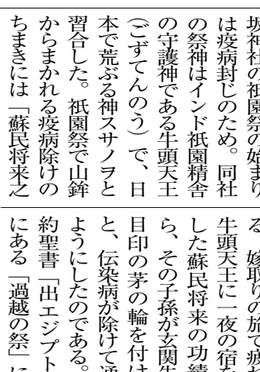
「たいてい新型のインフルエンザは、中国南部の農村部の家禽と家畜が人家の中で飼育されているような環境下で（中略）種の違いを超えて、アヒルとブタとヒトのお互いの体内に別種のインフルエンザウイルスが取り込まれ、そこでウイルス同士の遺伝子交換が行われて、新種のインフルエンザが発生すると言われて久しい。（中略）中華人民共和国当局も、『不都合な事実』を隠そう隠そうとするので、このときのSARS禍も、国際社会からの発見が遅れ、これだけ被害を拡大させてしまった」

三宅師は本年1月13日、自身のFacebookで次のように述べている。

「中国の内陸部で、またぞろ新種のコロナウイルスが原因とされる新型の肺炎が発生した。私はこれまで何度も、『生きているものはなんでも食べる』中国人の食文化が、『本来はけものの感染症であった病原菌やウイルスを人類社会に持ち込んでいる』と警鐘を鳴らしてきた。（中略）肉体的にも精神的にも『無菌培養』されている日本人に、中国から禍々しいものが持ち込まれないことを切に願う」（5面に続く）

三宅善信師

延命寺の花祭り法要＝4月4日、埼玉・さいたま市



『風邪見鶏』

灯

「フィリポが、『主よ、私たちに御父をお示しください。そうすれば満足します』と言うと、イエスは言われた。『フィリポ、こんなに長い間一緒にいるのに、私が分かっていないのか。私を見た者は、父を見たのだ。なぜ、「私たちに御父をお示しください」と言うのか。私が父の内におり、父が私の内におられることを、信じないのか。私があなたがたに言う言葉は、勝手に話しているのではない。父が私の内におり、その業を行っておられるのである。私が父の内におられると、私が言うのを信じなさい。もしそれを信じないなら、業そのものによって信じなさい。』」（ヨハネ14：8―11）

福音書にはイエスが最後の晩餐の席で弟子の問に答えたことばが記されている。イエスは、創造主である神と被造物である人間は本来親子である、との理解に立っている。創造主を「アバ、父よ」と呼んだイエスに、弟子は父を示してほしいと願った。イエスの答えは、「神のひとり子」を見よ、だった。神の似姿である真の人の思い、言葉、行いに創造主の姿が映し出されている。そのモデルに倣うのが人の生き方だというのだ。（T）

天地

天地子が暮らす自治会の名前は天王で、小高い山の上に「お天王さん」と呼ばれる小さな神社がある。自治会名は、そこの御祭神、牛頭天王に由来している。日本のスサノヲと習合した疫病退散の神で、同じ名称の地域が日本各地にある▼里の田んぼの中には、隣の商店もある自治会と一緒にお祀りしている八坂神社があり、8月終わりには秋祭りで賑わう。昔は境内に露店が並び、浪曲や講談まで催されていたが、今は子供向けのイベントやカラオケ大会をするくらいで、集まる人も少なくなった。今年、自治会長になったので催しの企画を立てないといけないのだが、もしかしたら、宮司に自治会役員だけでのお祭りになるかもしれない▼天王社、八坂神社に疫病退散のご利益があることはほぼ忘れられていて、残っているのは地域の連帯性。拝殿の壁には、社殿建設に寄付した祖父や父の名前が書かれ、歴史を感じる空間になっている。長老の中には父のことを知る人もいて、懐かしそうに思い出話をしてくれる▼農作業の機械化で、寄り集まっての田植えなどの共同作業がなくなり、農村でも個人化が進んだが、近年は経済性や後継者の問題で、農事組合法人による共同作業が復活している。母の介護のためUターンした天地子もそれに参加し、新しい暮らしが始まった。そんな個人的な歴史からも、人は変わるし、社会も変えられると思う。

人生の苦しみに積極的な意味はあるのか？
『21世紀に生きる日本人のための浄土思想』の出版を記念して、平成26年3月から28年11月までの5回にわたる講演をまとめた著者渾身の生命の書。

私の生命（いのち）の復活
上橋 泉 著
四六判296頁（本体1500円＋税）
日本人の宗教性（霊性）は回復するか？

株式会社 如月出版 販売部
〒152-0023 東京都目黒区八雲2-24-15 ラ リュミエール1F
TEL 03-6657-9000 Fax 03-6657-8999
http://www.kisaragibook.com

新刊！

社説

ポスト・コロナの世界と宗教

NHKテレビのインタビュー「〝コロナ危機〟どう生きる」で山中伸弥さんは、「最初はコロナとの〝闘い〟という表現を使っていたが、今はもう使っていない。ウイルスとの〝共存〟、平和的共存だと思っている」とし、「ウイルスを完全になくすことは不可能なので、人間社会がソックアウトされないように、いかに徐々に受け入れるかで、この数か月できるだけ人との接触を避けることが我慢のしどころだ。その後も昔のように自由にはならず、ある程度の我慢、工夫を1年、あるいはそれ以上続けることになる」と語っていた。

感染症が人類の歴史を大きく変えてきたことから考えると、大恐慌以上の危機とされる新型コロナウイルス感染症は、キリストの生誕によって分けた紀元前後と同じ規模の変革をもたらすかもしれない。人間社会の在り方、私たちの生き方はどう変わるのだろう。

ウイルスとの平和共存

2014年に国際アンデルセン賞を受賞したファンタジー作家の上橋菜穂子さんは『物語ること、生きること』（講談社）で、「物語にしないと、とても伝えきれないものを、人は、それぞれに抱えている。だからこそ、神話のむかしからたくさんの物語が語られてきた」と述べている。受賞後の最初の長編『鹿の王』のテーマは感染症だ。

上橋さんの作品には、ファンタジーに現代社会の課題が織り込まれている。テレビ化された『精霊の守り人』では、建国神話に隠された王の秘密が最後に明らかにされ、歴史は勝者に書かれることをほのめかす。『月の森に、カミよ眠れ』は、律令制度に取り込まれていく九州の村が舞台で、村を変えるべきか古い暮らしを守るべきか、葛藤する人々が描かれている。時代や社会の影響を受けながら、自分の行動で社会を変えていくのが人間である。『鹿の王』のあとがきには、「人（あるいは生物）の身体は、細菌やウイルスやらが、日々共生したり葛藤したりしている場でもあり、それは社会に似ている」とある。

頭脳が高度に発達した人間は、物語を紡ぎながら生きていく生物であり、宗教もその核心部分は物語で構成されている。創唱宗教では教祖、宗祖の個人史や教団の奇蹟や迫害の歴史が、多くの編集の手を加えられ、人々の心に浸透しやすく、感動的に仕上げられている。骨格になるのは理論、思想だが、人に伝わり浸透するのは物語としてである。

古代の宗教は当時の知や技術の総合であり、奈良時代の南都六宗のように、宗教というより大学だった。空海は土木技術から水銀の精錬法まで唐から持ち帰ったとされる。近代化に伴い、宗教はその周辺部分を独立させ、宗教とは何かを問い直しながら、核心的な教理を磨いてきた。それが、その時代、その社会で人はどう生きるかという価値観の形成を促したのである。

山中さんは「今は日本人の規律というか、自律性が試されているいわれかし。」と祈る。法要の最後は般若心経で結ばれた。

その後、再びヨシダダイキチ氏が40分にわたりシタールの演奏。祈りと音楽であたかも浄土のような空気に包まれ、不安や恐れ、日常のストレスから解放される時間となった。

境内で法要に参加したのは、近隣の住人数名。受付では手を消毒、式次第と梵字の記された紙製の「魔除けのマスク」が配布された。

「今年の花祭りを皆さんにご案内するかどうか最後まで迷ったが、こういう時だからこそ祈ることが必要と思った。幸い境内で密集を避けて出来たのでほっとしている。近年は、本堂の中で法要を行ってきたが、最初は境内で音楽や踊りで祝ってきた。原点に戻ったようだ。」法要を終えた住職はこう語ってくれた。

お釈迦様の生誕祝う花祭り

シタール演奏でインド偲ぶ

さいたま市延命寺

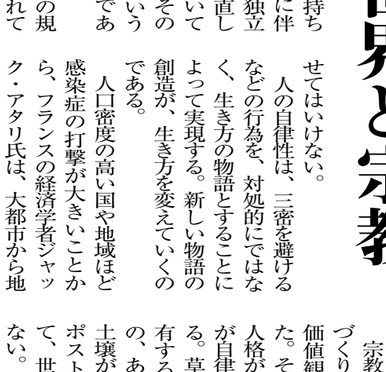
4月4日の午後、さいたま市浦和区の天台宗延命寺（河野亮仙住職）で、お釈迦様のご生誕をお祝いする花祭りが開催された。JR浦和駅から数分の住宅地にたたずむ延命寺は、天長6年（829）の創建とされ、入口には樹齢約400年の市指定天然記念物ムクノキがそびえる。

延命寺の花祭りは、従来、音楽と踊りで華やかに祝ってきた。「インドの芸能は、もともと神様の前で上演し、神仏に喜んでもらうための法楽。神仏を勧請して花を散華して供養するもの」と住職は解説。本年も、シタールの演奏、法要、インド舞踊などが準備されていたが、新型コロナの感染拡大の影響を受け、感染防止策を徹底するなか、規模を縮小し、境内での屋外法要となった。

幸い、この日は快晴に恵まれ、4月下旬の陽気となり最適の環境が整えられた。

河野住職の挨拶の後、シタール奏者のヨシダダイキチ氏の演奏。神秘的なインド楽器の音色に、境内が浄められ心落ち着かせるものとなった。その空気の中で法要が厳修された。本堂入口に設置された花御堂の両脇に式衆が立ち、声明の後、導師の河野住職が表白。精魂こめて仏頂尊勝陀羅尼を唱えた。

仏頂とは、仏の32相の一つで頭頂の骨肉塊のこと。これが神格化された仏頂尊は、頭頂から光を放ち一切の悪業を滅ぼし、寿命を延ばすという。陀羅尼では「普く光明が広がる自性清浄なる仏頂よ、悪業を除いて浄め給え、浄め給え、偉大な真言句によって私を灌頂し給え。諸苦悩を除き給え、…全く清らかなものよ、勝利あれ、わたしの身体を金剛不壊になし給え、わたしを蘇らせて下さい。悟らし給え、幸いあれかし。」と祈る。


シタール奏者ヨシダダイキチ氏＝同上

本紙定期購読のお申し込みは

■ご希望購読期間　■氏名　■郵便番号　■住所
■連絡先電話番号　■メールアドレス（お持ちの場合）を明記の上、宗教新聞社宛、はがき、FAXまたはEメールで左記へお申し込みください。

宗教新聞社
〒一六〇―〇〇二二
東京都新宿区新宿5―13―2―4F
電話 03（3353）2940
FAX03（5363）5182
e-mail:religion@sage.ocn.ne.jp
http://www.religion-news.net
※購読料　年間6000円（税、郵送料を含む）

宗教新聞

発行所 宗教新聞社
東京都新宿区新宿5-13-2
〒160-0022
電話 03-3353-2940（代）
FAX 03-5363-5182
郵便振替口座 00130-9-22704
URL http://www.religion-news.net

©宗教新聞社 2020

購読料（税込）
1部　500円
半年　3,000円（〒共）
年間　6,000円（〒共）

〈社是〉
一、精神革命の旗手
一、宗教連合の具現
一、地上天国の建設

縄文のパワーフィールドへ
神道よ！今こそ《古来の本物の道》に戻るのだ！
奈良泰秀
エハン・デラヴィ 著
本物のシャーマニズムを日本人が忘れている。神道の潜在力を思い出し、世界に伝えていこう。ケルト民族末裔の意識研究家が、神道のエッセンスを聞き出す。チャネラー、ヒーラー、コンタクティを超える、宇宙と直接つながる知恵は、ここ日本の神道にあり！
四六上製1785円(税込)
株式会社ヒカルランド
〒162−0821 東京都新宿区津久戸町 3-11
電話:03-6265-0852　FAX:03-6265-0853
http://www.hikaruland.co.jp

日本宗教の闇
室生 忠著 四六判・520頁 定価：本体2,000円＋税
拉致監禁による強制棄教との戦い
信教の自由が保障された今の日本で、強制棄教を目的に拉致監禁が行われている。職業的強制改宗屋が家族を巻き込み、信者を拉致し、部屋に監禁して、脅迫的説得により棄教を迫る。特に世界平和統一家庭連合（統一教会）やエホバの証人の信者に被害者が多く、中には12年以上の監禁された人もいる。驚くべき宗教迫害のリポート。
アートヴィレッジ
受注センター
〒657-0846 神戸市灘区岩屋北町3-3-18・4F
TEL078（882）9305　FAX078（801）0006

日本よ、蘇れ 日本神話の知恵
ゆがんだ歴史観、家庭の崩壊、教育の危機…。いま日本は大きな危機に瀕しています。この現状を打破するカギは、実は「日本神話＝古事記・神代一」にあるのです。日本神話に満ちあふれる、愛と生命と知恵に立ち返ってこそ、日本の未来は拓けます。あなたも著者といっしょに、「神話の教え」をひもといてみませんか？
出雲井晶 著
●定価1000円（税込み）
●四六並製　232ページ
●発行・産経新聞社／発売・扶桑社
お問合せ先／扶桑社　販売企画部
〒105-8070　東京都港区海岸1-15-1
TEL03-5403-8859
購入申込み　FAX:03-3578-3075

『先代旧事本紀』の神髄を極めた著者が語る。足で調べた大和建国の謎。
（定価：本体2000円＋税）
日本国始め 饒速日大神の東遷
大野七三 著
須佐之男尊の出雲国創建後、饒速日尊が32従者と25軍団を従え、九州から大和に東遷して纏向の地に大和国を建国。その時、饒速日尊が配下を募り配置した今も残るその出自と足跡を立証する。
批評社
〒113-0033 東京都文京区本郷1-28-36 鳳明ビル102A
TEL 03-3813-6344　Fax 03-3813-8990

自由社ブックレット2
理想の政教分離規定と憲法改正
四六判87頁／本体価格500円
杉原 誠四郎 著
憲法改正を見据えたとき、宗教に関する条項、規定は、真剣に考えねばならない問題である。
自由社
〒112-0005 東京都文京区水道2-6-3
Tel03-5981-9170 Fax03-5981-9171
http://www.jiyuusha.jp/

たま出版
www.tamabook.com
魔のJR中央線
自殺霊の撮影で判明したこと
斎藤 齋靈 著
四六判158頁 定価1,365円（税込）
十年の歳月をかけ、ついに自殺者の霊の撮影に成功。霊能者が書いた自殺防止の書。死んでも痛みは残るもの、自殺者の言い分〝こんな筈では〟自殺をした状態で霊はさまよう、硫化水素自殺、政治家と自殺、自殺の多いJR中央線の謎を解く！
アシレス出版部発行
お近くの書店にない場合は下記へ 送料210円
〒229-0002 相模原市淵野辺本町2-17-14
TEL042（751）2558　FAX042（754）1818

山喜房佛書林
神野富一著 A五判 五八〇頁 本体一六、〇〇〇円
補陀洛信仰の研究
チベット・アジア各地の補陀洛信仰とその伝播ルート等の集大成
福田亮成編 B六判 二九〇頁 本体五、八〇〇円
弘法大師聖句集成
本書は大師の言葉が読者の心に直接届くよう工夫され、掲示伝道や寺報の種子に最適。
〒113-0033 東京都文京区本郷5-28-5
TEL：03-3811-5361 FAX：03-3815-5554